
『愛してる』

g.j.jijo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『愛してる』

【Nコード】

N0724X

【作者名】

gg.j.jijio

【あらすじ】

男と女の恋愛は人生を変えてしまいます。我々は1度の人生でどれだけの人と出会えるでしょうか。一つの学校、あるいは会社での出会いが運命を変えてしまう。この小説の主人公、丸山正儀は、ごく普通の青年です。ただ、ちょっと可愛らしく、曲がったことが大嫌い。その彼がとんでもない運命に陥ります。果たしてその結果は……。この小説はFC2小説に投稿しましたが、まだ連載されていません。

パーソナル・ヒストリー

きょうは何曜日だったかな。こう面接が続くと曜日の間隔が麻痺してくるな。編集職を求人誌で探すのも俺くらいだろうな。みんな取引相手にうまくとりつくろって新しい仕事を決めてから会社を辞める奴が多いが、俺はそういうのが嫌いだ。なぜなら、育ててもらった恩義を忘れて、次の仕事場を探しながら働くという行為が許せないからだ。俺の場合、いままで音楽雑誌でしか書いたことがないから、他のジャンルを扱っている会社に入れればいいな、と秘かに思っている。だが、自分が考えるほど世の中は甘くない。とどのつまるどころ俺には音楽しかないのだ。モータージャーナリストになることが小さい頃からの夢だったが、そんなものは俺にメシを喰わせてくれない。ビートルズのナンバーだったら俺の筆は進む。だが、どんなに刺激的なスポーツカーのエンジン音を聞いても筆の速度は進まないだろう。それが文筆の世界である。

音楽でメロディー、ハーモニー、リズム、どれが一番大切か、と音楽関係者に聞かれることがある。しかし、俺には答えられない。なぜなら、俺には曲を作る発想と技術が未熟だからだ。言葉なら何を書きたいか、を頭にインプットすれば、単語の2つや3つすぐにイメージできるが、作曲の場合そうはいかない。たとえいいメロディーが浮かんだとしても、音感がないから実際に楽器で音を確認しなければならぬ。特に音を拾うのは馴れないから厄介だ。それに楽譜に記すことも音楽を難しくする。さらにいえば、文章を書く人にはまったく持ち合わせのないセンスも必要である。つまり言葉をつらねるには話すことができればいつかは書けるようになるかもしれない。だが、音楽はそうはいかない。まず、ひらめきがなければいつまで経つてもいいメロディーなんてできやしない。印象に残るメロディーを生み出すにはある程度の資質とセンスが求められる。たまたま1曲ぐらいは素晴らしいひらめきがあるかもしれない。だ

が、何曲も続けていい作品を作るには相当な実力を持っていないければ実現は難しい。つまり、オリジナリティ、プラス、バリエーションがなければならぬのだ。そのうえ、楽曲のいい、悪いはみんな簡単に決める。作曲者がどんなに苦勞して作ったものでもそんなこととおかまいはない。聞いて気に入らなければ「よくない」ですべて終わってしまうのだ。どこが悪いのか、と聞かれれば答えるのは微妙だ。「ノリが悪い」「インパクトがない」など、言葉を並べることはできるが、的を射た指摘というのは難しい。そもそも音楽で伝えたいものと文章で伝えたいものでは表現する内容が違うからだ。それなら作詞はどうなるのだ、と疑問を持つ人もいるだろう。作詞は言葉の韻^{いん}を考えたり、音符の数に合わせたり、言葉のリズムを考える。つまり歌うことを想定した文章だ。その点小説の文章は、読むためのものということになる。だから必然と重要なポイントも変わってくる。音楽は印象が大切だが、読む文章は意味合いが大切になってくる。おまえはどちらが好きか、と問われれば話は複雑になってくる。聞くだけなら音楽のほうが好きだ。だが、現状では音楽でメシを食べるにはあまりに課題が多い。そして時間も必要だ。そして文筆はいまは生きる糧である。

パーソナル・ヒストリー（後書き）

ファースト・インプレッション1

さて、え〜ときょうの面接先はFMクリエイトだったな、半蔵門線の終点か。まあ通うには1時間以内だし、FMって会社名だから音楽に関係する仕事だろう。求人広告には編集者急募とあったが、編集なんて会社によって月とスツポンの違いがあるから気をつけなといけな。俺は面倒な人間関係は作りたくないし、まして力関係でつき合いかたを変えるなんてやり方はごめんだ。いいものはい、悪いものは悪いといえる人間関係が望ましい。確かにレコード会社から広告をもらって、本文で「あの曲は最悪だ」なんて書けるはずがない。それでもレコード会社の宣伝マンにはいいたいことをいう。彼らの制作部のコンセプトは充分聞くし、ヒットの狙い方も吟味する。だが、音楽で1番大切なことは、多くの人に意識させることだ。どれだけ多くの人の心に印象づけるかが鍵なのだ、他には何もいらぬ。だから、大切なのはくどい説明より、インスピレーションだ。音楽雑誌に必要なものはこの直感を読者に与えることなのだ。音楽を言葉で並べて説明することではない。これが俺の大切にしてきたことだ。雑誌の編集なんてただでさえ忙しいのに、さらにサンプル盤を聞いたり、毎晩コンサートに行かなければならない。まあ、マスコミを集めるのはレコード会社の宣伝部やプロダクションの人間の仕事だから見に行つてやりたいが、10日間連続とか、ひどいときは30日連続なんてことがある。演歌からポップス、ロック、クラシックなどジャンルの違うコンサートが続くとだんだん気が滅入ってくる。俺はスピードのエアスじゃない。コンサートの内容を読者に伝えるという指名は俺にはある。だが、興味の薄いコンサートを細部まで分析するのはすごくしんどい。集中力が持続できないからだ。その結果、すいません、今回ページがなくて5行しかないから勘弁、と行って逃げるのだ。ひどい、最低、なんともいえ、俺は何十日もまとまな夕食を食べてないのだ。家に帰っても

風呂に入って寝るだけだ。

おつといけない、これから面接に行くところだった。昔の編集の話をしてもしようがない。えくと平河町3丁目押尾ビルは……。この辺だよな。2階はく看板がないかな？3-15-2はく、ここは12-1か、ということは進行方向右だな。人に聞いてみるか。あつ花屋見つけ。さっそく聞いてみよう。

ファースト・インプレッション2

「すみません、この辺にFMクリエイトって会社知りませんか？」

「その喫茶店を左に曲がった右側のビルの2階ですよ」

「すぐわかるなんてよっぽど有名なんですね」

「だってよく花を届けますもの」

「ああ、そうか、なるほど」

「私知らないように見えました、ショック。なぜ私に聞いたんです」

「かわいいから」

「わあ、下心まる見え」

「ついでにソバージュにも弱い」

「私、明日モヒカンにする」

「僕はもつと好きになるかもしれない」

「ああいえば、こういうのね。大人気ない、私はあなたに興味ないし」

「あつそうか、ごめんなさい、仕事中ですよ」

「教えてくれてありがとう、お礼に真っ赤なバラの花を1本ください」

「1本ですか」

「はい、あなたにあげます。もう1度会えるという願いをこめて」

「え、困ります、そんなつもりで教えたわけではありませんから」

「僕の勝手な願掛けですから、売ったつもりでそこにもどせばいいじゃないですか」

「え、そんなことできません」

「じゃあ、あなたが仕事を終わるのをあそこの喫茶店で待ってもいいですか」

「え、私にはつき合っている彼がいるんです」

「安心してください、この街の特色とか生活感が知りたいだけです」

「えー、そんなこといわれても困ります」

「そこをなんとか」

「えー、困る〜！」

「面接があるのですいません、もう行かないと」

「私絶対行きません」

「はい、おつりはいいから、ありがとう」

「待つても無駄ですよ」

「気にしません、じゃあ」

「あ、おつりです」

俺は振り向くこともなく会社に向かった。

ファースト・インプレッション3

「右側のビルの2階だったな。FMクリエイトはと……、あつ、あつた」

結構綺麗な建物だな。エレベーターがあるが階段で行こう。しかし緊張するな、とにかく扉を開けよう。

「すみません、きょう2時から面接予定の丸山です」

「はい、お待ちしていました、こちらへどうぞ」

「ありがとうございます、報国新聞社が近いんですね、私は芸能ニュースを配信する記者もやった経験があるのですが建物を見るのは初めてです。ここでは報国新聞社と仕事のつき合いがあるのですか？」

「はい、たまにフロッピに記事を入力することもあります」

「フロッピに入力？なんですか、それは」

「パソコンを使ったことではないのですか？うちでは必ず必要になるですよ。まあ焦らなくてもいいです。覚えるのはそんなに難しいことではありません。ただうちのオペレーターの入力スピードと正確さはピカイチです。あなたもうちに入れば必ず身につきます」

「はあ、入れればいいのですが」

「こちらでお待ちください、いま人事部長をお連れします」

わおー、いい女だな。秘書という感じじゃないし、服飾雑誌の編集者つてとこか、まあいい。女性がたくさんいる会社に入ったことがなかったからドキドキするな。この会社に入れば楽しいだろうな。いけない妄想は捨てよう、面接に集中しないと。

「失礼します、人事部長の加藤です。はじめまして」

「はじめまして、丸山です。よろしく願います」

「さつそくですが、わが社は『FMピュア』のFM番組表と編集が主な仕事です。その他はタウン誌、ニューメディアの情報誌、単行本などがあります。これからわが社も本の編集に力を入れようと

いうビジョンを持っています。オペレーターはもうよそと比べることができない水準に達しています。だからあなたにコンピューター入力してくれなどということはありませんから安心してください。ただどここれからはコンピューターの時代になると思いますから覚えただほうがいい。必ず役立ちますから」

「私もこれからはコンピューターの時代になると思います。入れればぜひ身につけたい。だけど、私はいままで音楽業界の雑誌の編集に携わってきました。だから、『FMピュア』の記事の特集やさまざまな形でアーティストをブッキングできますし、いろんな企画立案が可能です。必ずお役にたてる日が来る、そんな確信があります」

「わかりました、今回は面接の人数も多いので結果を報告できるまで1週間かかります。申し訳ありませんがそれまで待つていただきます。あなたのような即戦力の人材が必要ですが、給料を多く払えない現状があります。そこは若い会社の可能性を信じていただきたい。このあたりでよろしいでしょうか」

「わかりました、お電話をお待ちしております。ありがとうございました」

ファースト・インプレッション3 (後書き)

の

アゲイン1

「わあ！ほんとに私が来るまで待つていたのですか」

「僕に二言はありません。たとえあなたが来てくれなかったとしてもこの店が閉店するまでいましたよ。面接は終わったし、あとは何もすることがないので」

「でもいま夜の7時半ですよ、あれから5時間以上も経っているのに」

「僕は人を待つのに5分も5時間の関係ない。本を読んでいるといつのまにか時間が過ぎてしまうのです。ただ、ちよつとたばこを吸いすぎたのとお腹が空いたな、これはいくら僕でも逆らうことができない」

「私が来ないとは考えなかったの」

「あなたが来てくれれば新しい会社にも入れるかもしれない、それが僕の願掛けといいましたよね。だから僕は運命に従ったわけです。あなたが来なかつたらそれはそれでしかたないし、僕はその程度の男でしかないと納得できます。だから来ないことも8割考えたんです。そのぶん来てくれたときはとてもうれしいから」

「私はいままでどんなにかっこいい男性でも、ナンパされてついに行ったことがあります。女の子に気軽に声をかける人は魂胆が見え見えて信じる気になりませんから」

「それでもあなたは来てくれた、それだけで僕はうれしい」

「私はバラ1本に1000円を渡して、せつせと店を去ってしまった人におつりを返しに來ただけです」

「でも来てくれた」

「商品を受け取らないのに代金をもらうわけにはいきません」

「でも僕のことは嫌いじゃない」

「そんな感情ありません、あるわけないでしょ」

「会いたくない人に会いに行きますか」

「銀行の口座番号を知らされていたら振り込みました」

「僕はそんな失敗しません」

「卑怯ひきょうです」

「チャンスは何度もない、失敗は許されない」

「迷惑です、彼氏がいるし」

「そんなことはわかっている」

「あなたは私のタイプではありません」

「僕は自分の感情に素直になっただけです、悪気があったわけはない」

「そんな気持ち無責任です、私には迷惑です」

「何もきょう君を抱きたいというのでない」

「あたりまえです、会ってから10分そこら話ただけでそんなことになるはずがない」

アゲイン2

「怒った顔もかわいいですね」

「なんですって」

「まあまあ、そこまで話が進んじやったら困るよね。僕は半蔵門の平河町という街を知りたいだけですよ、ちゃんと伝えたはずですよ。あなたと毎日会うことになるかもしれないのですから」

「えっ」

「だからきょう、あなたに教えてもらったFMクリエイトに面接に行ったんです。僕の職業は雑誌の編集なんです。残念ながらモデルのスカウトではない。だから安心してください、女性を気安く誘うタイプの人間ではありませんから」

「だけどお金は返します」

「お好きなように、でも近所に何かおいしいものを食べさせる店はないですか？僕に奢おごらせてください。お腹が空きすぎて倒れそうです」

「わかりました、毎日会うのなら変なことをするとは思えないから、一緒に食事をしてもいいです。だけど私はランチでしか食べることがないからコースでおいしいかは知りません。それでよければおいしいパスタが食べられる店を知っています。でもひとり4000円ぐらいするかもしれませんが、それでよければ」

「じゃあ、安いワインも飲めそうだ」

「え、はじめて会う人にお酒を飲ませるのですか」

「飲むのは僕だけでかまいません」

「え、それもズルい」

「僕にどうしろと？」

「じゃあ、ハーフトルをたのみましょう」

「わかりました、僕に任せてください」

「このすぐ近くにイタリア亭というおいしいパスタを食べさせ

るお店があります」

「僕はイタめしでも牛めしでもなんでもいい」

「ギユウメシ??？」

「まあまあ、とにかく行きましょう」

「そういえば、お互い自己紹介をしていませんでしたね。僕の名前は丸山正儀です。正義の味方に間違えやすいですが、儀はにんべんがつくのがミソです。僕自身はとても気に入っている名前です」

「私の名前は鈴木千優ちひろです。数字の千にやさしいと書きます」

「へえー、女の子らしいいい名前ですね、僕としては千といわず兆ぐらいやさしくしてほしいな。でもチヨウユウなんてトップクラスの大学生みたいでカッコイイと思うんだけどなー」

「えー、変態。いまごろ優・良・可なんて評価あるんですか」

「そうか、数字かアルファベットだね。でも、変態はないんじゃない」

「そんなことよりイタリアンが先です。早くたばこを消してください」

アゲイン3

「へえー、いい店を知っているね。内装も白を基調にしたいいい雰囲気だ。お客さんもたくさん入っている。お薦めはなんですか」

「私はこのカルボナーラが大好きです」

「じゃ、パスタは決まり、分けて食べるから大盛りでいこう。カリカリベーコンと卵の好敵手はどれがいいかな。敢えてトマトソースを選ばないなら僕のピッツア選びは、と。何か苦手なものありませんか」

「私はありません」

「じゃ、僕はシンプルなマルゲリータにしようかな、店のこだわりがわかるから。それとミネストローネスープを2つに、きこり風サラダをこれも大盛りで。ワインはハーフボトルでチーズに合う赤ワインの1500円までのものを。これでいいですか」

「私は十分です。わあ、晩御飯作らなくてすむ」

「一人暮らし?」

「実家は東京の町田。狭い公共のアパートに住んでいたから、社会人になってから飛び出したの。兄妹2人と両親が住むには2DKは狭すぎる。いまは世田谷のアパートで女友だちと2人で住んでいるの。ちゃんと部屋は別々です」

「へえー、偉いな。僕なんて車を持つているから狭いアパートで母親と姉貴と3人で暮らしている。車庫代が24000円もするから車は本当に贅沢ぜいたくだよ。でも、何ものにも束縛そくはくされない空間が僕にとって一番大切な時間なんだ。だから、ドライブは行く先も決めていないことが多いんだよ」

「私車の免許はあるけどペーパードライバー。いまだに免許を取ってから一度も路上を走ったことはありません。唯一自信をもつていえる」

「そんなことに自信をもってどうするんだ」

「でも、ないよりいいでしょ」

「花屋さんって車で配達がないの」

「だってお客さんは近所の会社とか、飲食店だからほとんど歩きます。あとは店番が多いです」

「僕は花言葉も知らないし、花の種類なんてチンプンカンプン。値段なんていったら未知だね」

「無知の間違いでしょ」

「いったな、だけど僕の高校時代の友人に、女の子の誕生日に歳の数だけ赤いバラをあげたら、つき合うことに成功したって奴がいたな」

「花をもらってうれしくない女性はいないと思う」

「本当！僕は女性に花束をあげたことが一度もないな、そんなことなら研究しとくんだった。千優さんは男に花をあげたことはある」

「ううん、あげたことはないですね。だって女の子から花をあげたってもらったほうは理解に苦しむだけだと思うから。女性の花に込める思いはとて深遠なんです。言葉では計り知れない」

「へえー、そういうえば彼氏の話を知りたいな」

「わかりました」

アゲイン4

「彼は広告代理店で営業をしています。背が高くて、ちょっとシヨーケンに似ている」

「じゃあ、僕は太刀打ちできないな」

「当りまえです。それに彼は高校時代ずっとラクビーをやっていたから躰ががっしりしているの。あなたは骨と皮しかないでしょ」

「自慢じゃないけど、僕は体重が48キロしかない。これ以上痩せたらサイズもメンズじゃなくボーイズになってしまう。そうなったらセンスのいいジーンズなんて探すのが大変だよ。そんなことより彼とはどこで出会ったの」

「高校が一緒だったの。彼がラクビーの選手で私がマネージャー。とても足の速いフオワードだったから憧れた女の子はたくさんいたわ。でも、私を選んでくれた。とてもうれしかった。だけど、大学に入ったらきつぱりとラクビーを辞めてしまったの。辞める理由を聞きたかった。私にはいつてくれると思ったのに」

「それだけが心残りなんだね」

「そう、彼の本心が知りたかった。聞きたかったけど、母親にこれと思った人についていきなさいといわれていたから、素直にしたがったの。私もつらいけど、彼はもつとつらいんだって感じたの」

「へえー、物語があるね。僕なんてそんな重い決断したことがないからよくわからないけど、僕ならすべて正直に話すね。だってそうじゃないとお互い支えあっていけないじゃないか。つまりラクビーを続けるのと続けないのでは歩むべく人生が違ってくるよね。そんな大事なことを一人で決めること自体おかしいよ。先輩とか監督はそのことを知っていて、つき合っている君だけが知らなかったら問題だな。一番はじめにこれから共に生きたいと思う女性に話すべきさ。先輩や監督のいうことはアドバイスにしかならない、結局決めるのは本人さ。未来像を予想するなんて真面目に考えない人が多

いけど、ある程度のビジョンをもつことは大切だと思う。そうしない^{のち}と後の人生で彼が挫折したとき君は失望しかない。まあ、男なら家族のためならどんな仕事もするだろうけど、あるとき現役を続けていたら広告代理店だけじゃなくいろんな道を模索できたはずだ。だから何も聞かずについていくのは、一見、日本の女性のおしとやかさのようだけど、逆に自分の首を絞めることになると思うんだ。もつと彼とよく話さなくちゃだめだよ、間違っているかな」

「ううん、間違っていないと思う。だけどスポーツ選手にはそれなりの試練とか女にはわからない考えがあると思うの。彼についていくだけ、そう決めたの」

アゲイン5

「女の子の人生なんて男によってガラツと変わるよね。安月給だったらつらいだけだし、人生設計のできない男に自分の人生を託すなんて無謀なこともしないだろう。彼がコピーライターを目指すことは悪いことだと思わない。だけど、幼い頃大人になったら就きたい職業が誰でも一つはあったじゃない。でも、実際にその職業に就いた人が少ないのはなぜだと思う」

「うまく説明できないけど資質とか才能がないと感じたか、または子供のときのイメージと実際は全く違うことがわかって挫折するんじゃないかな」

「いい線いつてる。だけど一番大切なことは最後まで諦めないことなんだ。ただ、日々努力することも必要だけどね」

「へえー、丸山さんは努力しているんだ」

「もちろん、顔で笑って心で泣いて……。あまりちゃかすなよ、いいこというつもりだったのに。あっカルボナーラもマルゲリータも来たね。さあ食べよう、ワインも口当たりが軽くてとてもいい感じだ。すごくおいしい」

「ごちそうさま、とてもおいしかった。バラより高くついてしまったわね」

「なになに、これぐらいの出費は痛くないさ。また話ができればうれしいな」

「彼氏に悪いからダメ」

「えー、僕は彼氏のライバルになれるのかい」

「それは無理」

「なんだ、まあいいさ、またこの街で君に会えるよう明日から一週間祈るさ」

「へえー、それぐらいで決まるんだ。毎朝会えるといいですね」

「それ本心？」

「違う」

「ちつともかわいくない、まあいいでしょ。じゃあね」

千優と別れてから彼女に話したかった内容が頭に浮かんだ。たとえば俺がコピーライターでプレゼンに臨むとしたら、徹底的にマーケティング調査をやり、これでもか、というぐらい討論したうえで最善のコピーを引っさげていく。でも、我々のコピーより後の順番のコピーが明らかに上回っていて、うちとしてはそのコピーより上を行くコピー作らなければならなくなったとする。だが、わが社をあげて徹底的に作り上げたコピーに対して、短時間でそれを上回る作品を作るのは至難の業だ。だけどこういふときスポーツマンは強い。ラクビーならノーサイドの笛が鳴るまで逆転を諦めない。相撲の力士なら二枚腰といわれる強いねばりで、劣勢であつても可能性のある限り闘い続ける。この姿勢が大切である。諦めたらその瞬間ジ・エンドだ。千優の彼氏もそういふ男だろうか。もしそうなら、いずれどこかで俺と会うはずだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0724x/>

『愛してる』

2011年10月20日06時07分発行